様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １７ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０３１３３

研究課題名（和文）エビデンスに基づいたロールシャッハ鑑別診断法の開発

研究課題名（英文）Development of evidence -based Rorschach differential diagnostics

研究代表者
伊藤　宗親（Ito, Munechika）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２８２３１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　複数の臨床群（統合失調症群とパーソナリティ障害群／自閉アスペルガー症群）において，種々のロールシャッハ法における各指標を検討した結果，1) Xu%が統合失調症を他の臨床群から鑑別する力のあること，2) カード6の平凡反応(P)数は，パーソナリティ障害群は他の臨床群より有意に多いこと，つまり，鑑別指標としての価値を有すること，3)その反応に「黒色」(C')が使用されたか否かが，統合失調症と自閉アスペルガー症を鑑別し得る可能性が高いことなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　統合失調症，自閉スペクトラム症，パーソナリティ障害とを鑑別し得る指標を抽出し得たことで，当初予定していた方法論とは異なりはしたものの，ある程度所期の目的は達成できたと思われる。今回得られた指標は，臨床実践の場において鑑別に困難を極めるケースにおいて，その判断の参考になり得よう。
　適切な診断をなすことで，患者に不利益を回避させ，より精度の高い治療を提供できることは，社会的に見ても極めて意義のあることだと思われる。

研究成果の概要（英文）：The results of the Rorschach in several clinical groups (schizophrenia and personality disorder/autistic Asperger's) showed that 1) Xu% has the power to differentiate schizophrenia from other clinical groups, 2) the number of popular responses (P) on card 6 is significantly higher in the personality disorder group than in other clinical groups, In other words, it has value as a differential index and 3) whether or not "black" (C') was used for that response can differentiate schizophrenia from autistic Asperger's.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ロールシャッハ法　鑑別指標　統合失調症　自閉アスペルガー症　パーソナリティ障害

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

統合失調症の鑑別は，心理アセスメントを医療現場で行う際に極めて重要な作業に位置づけられてきた。とりわけ，統合失調症と重篤なパーソナリティ障害との鑑別，統合失調症と自閉スペクトラム症との鑑別は常に臨床現場では検討対象となることが多い。鑑別に有用なアセスメントツールとしてのロールシャッハ法は，その有効性が多くの臨床家によって確認されてはいたが，ケースによっては鑑別作業に困難を来すこともあり，また，エデビデンスに基づいたわかりやすい指標の確立には至っていなかった。そこで，シンプルな鑑別指標を開発する必要性が認められていた。

２．研究の目的

統合失調症を他の疾患と区別するための指標を作成することを目的として，最初の 2 年では，これまでの指標の特徴，特に陽性的中率を明らかにし，その上で後の 2 年間で，新たな指標の抽出ないしは作成に取りかかることをその目的とした。その際，統合失調症群と他の精神疾患群，パーソナリティ障害群，気分障害群，自閉スペクトラム障害群など，一部臨床症状が重複し得る疾患群との鑑別を念頭において，群の設定を試みた。

また，指標を作成する際に，さまざまなロールシャッハシステムのうち，最も新しい R-PAS による指標を作成することをその目的とした。

３．研究の方法

これまでの知見から，群間の有意差をもって鑑別可能の有無を検討した研究が多く，陽性的中率といった指標を用いていた研究が少なかったことから，まずは，群間比較を行った上で陽性的中率を算出することとした。

上記をもとに，データ収集を予定したが，COVID-19 となり，まず当初予定していた R-PAS による実施が困難となり，スコアリング・システムを問わずデータを収集することとした。用いられたシステムは，片口法，阪大法，包括システムであったが，すべてのスコアを片口法に変換した上で，データの分析に当たった。しかしながら，診療上の制限などから，思うようにデータを収集することができず，既存のデータも含めて解析の対象とすることで群間の比較を可能とした。このことは，データ収集が予定通りに進まない場合の代案としては予定されていたので，過去のデータの選別収集と新規データの収集とを合わせて，比較に耐えうるサンプル数を確保した。

４．研究成果

まず，申請者が以前に行った研究データ(2014)を対象にそのオッズ比を検討したところ，Xu%で 7.85,平凡反応数で 1.60 という有意もしくは有意傾向の値を得た。この成果は，ヨーロッパ心理学会にて発表した(2019)。ただし，前者は，包括システムによる指標であるため，過去のデータすべてに適応することが難しく，以後の研究では，後者の平凡反応数を詳細に検討することで，陽性的中率に変わる新たな指標の作成を試みた。その際，当初は統合失調症，気分障害，パーソナリティ障害の 3 群での比較を予定していたが，気分障害に代えて自閉スペクトラム症群を含めた方が臨床的意義が高いと考え，統合失調症(26 名)，自閉スペクトラム症(19 名)，パーソナリティ障害(27 名)の 3 群を比較することとした。このことの背景には，臨床実践の場で，医師が統合失調症と自閉スペクトラム症との鑑別補助という依頼によるアセスメント・オーダーが増加しているという点が挙げられる。

その結果，すべての平凡反応を検討した結果，カード 6 の平凡反応数について，パーソナリティ障害群が統合失調症群と自閉スペクトラム症群に比して有意に高いことが確認され，有力な鑑別指標であり得ることが示唆された。これらの結果については，国際心理学会(オンライン)において発表を行った(2021)。さらに，いずれのカードにも平凡反応を産出しなかったデータを除いて分析を行ったところ，平凡反応を産出する際に，そのカード特性のうち「黒」に言及した反応，すなわち C’系を決定因とする平凡反応の数が，有意傾向ながら統合失調症群よりも自閉スペクトラム症群に多いとの知見を得た。この成果は日本ロールシャッハ学会にて発表した(2021)。

このことは自閉スペクトラム症群の方が不安や抑うつを体験しても平凡反応を産出し得るという体験の差を反映していると考えられ，先のカード 6 の平凡反応出現率と合わせて考えると，鑑別指標としての価値を有していると思われる。

以上，当初予定していた方法による検討とは異なる形式での指標の開発となったが，ある程度所期の目的を達成できたと思われる。また，関連して，周辺領域の研究を徐々に進め，その成果

を発表してきている（岐阜大学カリキュラム開発研究等:2022,2023）ので，次なる研究計画の立案につなげていきたい。

（まとめ）

・平凡反応のうち，カード６の平凡反応数のみが，パーソナリティ障害群を統合失調症群，自閉スペクトラム症群から有意に鑑別することが可能であり，その数において，パーソナリティ障害＞自閉スペクトラム症，統合失調症という関係が成立する。

・全反応の中で，ひとつでも平凡反応を産出したプロトコルでは，その反応生成において黒を用いた平凡反応(C’系)数について，自閉スペクトラム症＞統合失調症という有意な関係が成り立つ。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 服部信太郎・伊藤宗親	４．巻 38
２．論文標題 ロールシャッハ法における言語表現と実行機能との関連について－境界性パーソナリティ障害が疑われた3事例をもとに－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	６．最初と最後の頁 96-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂本佳織・伊藤宗親	４．巻 38
２．論文標題 高齢者の妄想－ロールシャッハ法による理解－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	６．最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 伊藤宗親
２．発表標題 平凡反応に「黒」を用いる理由－統合失調症，自閉スペクトラム症，パーソナリティ障害の鑑別という観点から－
３．学会等名 日本ロールシャッハ法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 ITO Munechika, Tsuge Hisae, Hattori Shintaro, Sakamoto Kaori, Azuma Haruna
２．発表標題 Look at the Card 6 : the differential power of the Rorschach popular responses
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Munechika ITO
２．発表標題 The diagnostic value of the subjective evaluations on the Rorschach : re-analysis
３．学会等名 17th European Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	服部　信太郎 (Hattori Shintaro)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関